

## 「沖縄・再び戦場へ」 作品上映会 感想等

- ・座り込みが力で排除されているところ。
- ・全て。県外に住む者（ニュースにならない）は、なかなか実情を知れないことが・・・
- ・那覇市の避難訓練。人民の訓練は、具体的意識作りに役立つのであろう。いろいろな方向から見られる経験を持ちたい。

・このような形で沖縄が戦場化されているというリアルなシーンは、テレビニュースなどでも見る事がなかったので、ショック。どの場面もごく普通の人々が抗戦しており、厳しい状況と思う。時代に流されてしまう情けない人々、私も残念ながらその一人なのか？

・宮古島や与那国島、沖縄本島・・・住民の方々が”平和を守りたい””戦争はிரない”と行動する姿に感動しました。又、与那国の方々が”負けてばかりで疲れた”、という言葉も胸にぐっときます。でも、止まられませんよね。反対！政府が進める軍備増強の中、”反対”の声を高く上げている人がいることの感銘を受けました。

・宮古島にミサイルが持ち込まれ、地元の人が「歴史的屈辱」と言われたことが印象に残っている。  
沖縄は薩摩に侵略され、琉球国を奪われ、先の大戦で捨て石にされ、サンフランシスコ条約でも切り捨てられ・・・そして、また・・・。

- ・市民運動の現場全般。大きな権力に対して、一人一人の市民が必死な抵抗をしているところ。
- ・軍事力を強めること自体が戦争の方向だということです。専守防衛に徹することです。
- ・抗議行動、若い方、特に女性が多かったのが印象的でした。

・署名した人への圧力・・・負け続けると疲れてしまう気持ち。弾薬庫と民家の距離。公道を走るストライカー（装甲車）。

・シェルターを作る。ビックリしました。戦争をしないと決めた日本に印象的でした。シェルター、弾薬庫がなぜ？戦争をしないための軍備、良く聞きます。やっぱり理解ができない。

・若い人が発言して、歌の言葉が取り入れられたということです。「争いではなく愛し合おう」若い人の力に期待します。今までのスローガンに手を上げる集会では、どうかな？古いのではと、感じています。

・デモの場面・・・戦っている現実があった。

・座り込み、体を張っての抵抗の姿。戦争の空気が怖いと言っていたこと。自衛隊基地は、地域おこしになる面を評価する人もいて、住民の分断もともなって強引に進められてくる。日本政府は、米国、米軍によりそって動く。

・国の制作は、「初めに戦争ありき」で動いている。みんなが強くて反対しても戦車やトラックの前では無力。反対運動を長く続けて行くこともむなしい。大変だ。「もう戦争は始まっている」「今ならまだ止められる」広げていかないといけない。南薩では、低空飛行やミサイル？騒音がすごい。これ以上に沖縄はもっと身近にせまってきているんだよなあと怖くなる。